

脚本「逢魔が時」

脚本・原作 アイオーエー
オリジナル脚本 LOVE

イメージイラスト
繭 茉由莉
放送後音声公開可
放送後脚本公開可
二〇一八年十月二十三日

登場人物

少年 「しょうねん」 (男) 演劇部の少年
女 「おんな」 (女) 失恋した女
老人 「ろうじん」 (男) 廃屋にすむ老人

慷慨・あらすじ・プロット

自ら命を絶った者の魂は、永遠に死の瞬間を繰り返すという。
どこかで聞いたそんな話を女はふと思いつき、せめて最期はあの人との
思い出の場所だと虚ろな目をしながら道中つらつらと逡巡していた

文字数 2200 約文字
所要時間 約10分

1.

(N) : ナレーション

「逢魔が時」脚本・原作*「OA(あいおーえー)」

登場人物

少年「しょうねん」

地元の高校に通う演劇部の少年。

公演を間近に控えている

女「おんな」

失恋した女。元恋人の結婚式を間近に控えている

老人「ろうじん」

どこからともなく現れた不思議な老人。

【何か】を間近に控えている

N

自ら命を絶った者の魂は、永遠に死の瞬間を繰り返すという。どこかで聞いたそんな話を女はふと思い出し、道中つらつらと逡巡していた

2.

はじまり

女

「もし、もしも本当にそうなのだとしたら…。
せめて最期はあの人との思い出の場所で、幸せだった頃を思いながら…」

N

「人生に絶望した一人の女が、虚ろな目で夕闇に沈む廃屋に消えていった。」

それからさほど時が進まぬうちに、もう一人、
廃墟を訪れる者があった。学生服を着た、いかにも生真面目そうな少年だった」

少年

「そうだ、私が死神だ。」

「……ウーン、なにか違うな。」

演劇部の公演まであと一週間か。」

「ここなら雰囲気もあって、人も来ないから心置きなく練習できる」

S E 少年..

外套をさっと羽織る

軽く咳払い

少年

「そうだ。私が死神だ。」

「この死神様をわざわざ呼び出したのだ。なにか深い事情があるのだろう。訳を言ってみよ」

S E 瓶が転がり落ち、

錠剤が散らばる音

女

「ア、ア、嗚呼……。死神様」

少年

「ワアア！ひ、人が、いる……。？」

女

「呼び出したのはきつとわたしです！

「わたし、ここで命を絶とうと思っていたところでした。でも、でも……。ある考えが頭をよぎって、どうしても決心がつかないのです、死神様」

少年

「（小声で）ウワア、面倒なことになったなあ。」

でも、この人に死なれても困るし。仕方ない

死神に成りきって思いとどまらせるしかない」

少年

「エエと……。女よ。ある考えとはどのようなものだ。なぜ死にたいと願う」

女

「はい、実は……。わたしには長年連れ添った婚約者がおりました。それなのに彼の身勝手に婚約

女

約者がおりました。それなのに彼の身勝手に婚約

は破談に。半年後、彼は別の女性と結婚するから式に出席してほしいというのです。」

「うわぁ…そりゃひどい」

「そして、その式の日というのは明日なんです。

こんなの、あんまりじゃありませんか！

「確かに…あんまりだ」

「彼を嫌いになった訳ではありません。むしろ想いはいつそう強くなりました。彼が、他の女なんかと結婚するのは耐えられません。せめて式の当日にわたしの死を知って、わたしを捨てたことを悔やんで、嘆いてほしいのです」

「なんと哀れな……」

「教えてください、死神様。自ら命を絶った者の魂は、永遠に死の瞬間を繰り返すというのは果たして本当なのでしょうか。わたし、それが気がかりで」

「うむ。それは真実だ。死ぬ瞬間の恐ろしい恐怖だけが幾度となく繰り返される。それこそ、もう死にたいと願うほどに、何度も、何度も。でもそれも叶わぬ。お前は完全に死ぬことさえできなくなる」

「それは…いつまでも終わらないと？」

「左様。大抵の人間は、死んで生まれ変わり、もつとマシな人生を歩み直せると信じておる。だがそれは間違いだ。どんな人生であっても、それは神が与えし試練。その者が乗り越えられない試練は与えぬ。逆に言えば、その試練を乗り越えて魂の成熟を感じ得ねば、次の人生は今よりもっと悪いものになるだろうよ」

女が静かにすすり泣く

少年

女

少年

女

少年

女

少年

女

少年

少年	少女	少年	少年	SE…女足早に立ち去る
	「（小声）参ったなあ。無我夢中で劇の台詞をほぼそのまま言ってしまったけれど、余計落ち込ませてしまったか？」	「……死んでも良いことがないのなら、いつまでもうじうじとしてはられないわね。	死神様、ありがとうございます。危うく無駄死にするところでしたわ。わたし、決めました。	生きて、あの人にわたしという女を捨てたこと、必ず後悔させてみせます！」
		「え、ちよ、ちよっと」		

4.

少年と老人

少年	少年	少年	少年	少年	少年	老人	老人	SE…突然大きく響く拍手	少年	少年									
									「可笑しいことになってしまった……罪悪感で胸が痛い……。でも、僕の演技力で一人の命が救われたのか。複雑だ」										
									「あ、あなたは!？」										
									「ほほほ。見事だった、小童よ。儂（わし）もいつあの者を思いとどまらせようかと伺っておったところじゃった」										
									「ああ驚いた。見ていたなら止めてくれればよかったのに」										
									「いやいや、儂が出て行って『死神様』の仕事の邪魔をしてもうても悪いじゃろう？なに、そんなに恥ずかしくありませんよ。なにか見込みがあるぞ、おぬし」										

少年	老人	少年	S E 遠ざかる足音	老人	N
<p>「や、やめてください。たまたま劇の練習をしていたから出来たことですから。ところでお爺さん、こんな廃墟で何を？」</p>	<p>「まあちよつとな。この場所は辺鄙なところにあるモンで、自殺志願者が後を絶たんのじゃ。だから僕も気にかけておった。ほれほれ、子供はもう帰った、帰った。もう勝手に忍び込んではいならんぞ」</p>	<p>「すみません。それじゃあ、お爺さん」</p>	<p>「やれやれ、こんなに愉快なこともない。まさか人間の子供に仕事を取られるとはなあ。しかし、まだ死ぬ予定ではない人間に死なれては僕が責められるからのう。あの子供は二人の命を救うたな。ほっほっほ」</p>	<p>「そう満足げに笑うと、一人の死神は、逢魔が時の薄闇の中に去っていった」</p>	<p>少年 「しょうねん」 くらさわつつみ</p> <p>女 「おんな」 三好麻美</p> <p>老人 「ろうじん」 十河圭祐</p> <p>ナレーション 十河圭祐</p> <p>原作・脚本 「アイオーエー」 ToA</p> <p>選曲・効果 十河 圭祐</p>